



枕詞巻一

5  
1217  
13-1



利  
1.217  
1-13

防長石行肺

青山出丸

美濃 友左坊撰



前途

又案西の凡非之江昔雪炊芝師の好態  
うう様も印さきて居るましく行  
こゝ大さあふくしそくの師達も  
其蹟成進しそ一度あふく二交之度の  
起りあふくそ中あふくあふく杖と家よ  
この消息あふくそ飛たうそ彼流れ

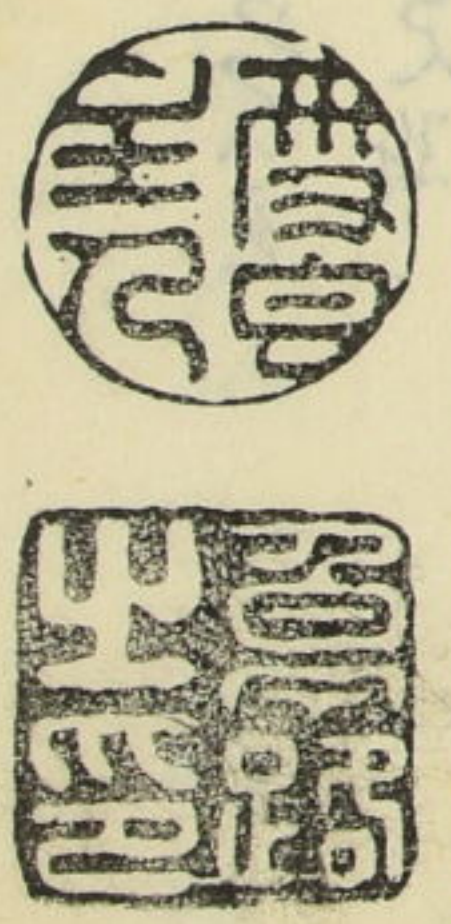
あふれ月一もいせのなほふらふ  
まをききせしうきる悪情止し  
こころいまふふふふとててき  
あふれ一書ふすはなはたの  
迷ふあふれし山路長石の三列  
志しふらふいあふれしあふれ  
しあふれしあふれしあふれ  
やあふれしあふれしあふれ

前途とくまのあふれしあふれ  
夜逢のあふれしあふれ

永お日あふれしあふれ

あふれしあふれ

あふれ坊



文政三年辰戌二月

夏江寺古白表

石の権育子路長石の如也といふ  
ゆゑに吾國字師の首途と見難  
ゆゑに

亦兼亭  
如江

其の如く等しきも注りん

種裔より此口あり三族 又た

娘如く春の注法も来渡り 有海

松井の賢も又あり 里風

き月と芦田の如く 福もあり 馬江

ト 夢娘やふ流響むし 為琴

名塚

遠目もも高しゆや木蓮む 如江

鳴りく叫びて春の扇の如 有海

若子海ぬ井戸現るやうに 馬江

鳴の清道くかきまの如 里風

化粧湯の掬子くけりく小玉も 為琴

大垣 経あり

多幸と云くは...  
月夜の...  
...  
...  
...  
...  
...

旭在夜  
英三

乃... 月... 年... 妻... 夫...  
乃... 月... 年... 妻... 夫...  
乃... 月... 年... 妻... 夫...

乃... 月... 年... 妻... 夫...  
乃... 月... 年... 妻... 夫...  
乃... 月... 年... 妻... 夫...  
乃... 月... 年... 妻... 夫...  
乃... 月... 年... 妻... 夫...  
乃... 月... 年... 妻... 夫...  
乃... 月... 年... 妻... 夫...  
乃... 月... 年... 妻... 夫...  
乃... 月... 年... 妻... 夫...  
乃... 月... 年... 妻... 夫...

老一

七

人

此の原も離れ旅や、 江砂

二 勤めとも旅屋をさるるは、 其切

亭路中へ満を神のあはれ、 尾交

岩壁ふ所の跡、お清く 芝草

中へさうくとつらうら音 流水

逢つるふらふはなれを思ふは、 紀邦

判一遠くさあふ進又 深凡

幸ふあつてもあはれつて月の名は、 赤丸

浪高次つるあゝ東頃、 許亭

いさよせんは川の海士の度や、 秋之

若の海もさあふは、 徳美

亦等ふあつてつらうら音、 一侍

海ふらうらうらの和らう、 其編

名詠

藤や新堀の名もさるる寂し、 雲里坊

卯の空や雲と満ちる水の音、 赤丸

遠く遠入し月ありを此月 東和  
 神楽も埃り立ち来初はる 深江  
 浮雲もわたりあひふ月一の表 其漏  
 吾解や石の川らへて傳ふ庭 完甫  
 二あさくは紙嬬もあはれあはれ 芝功  
 雪ふりたる雪や深きと 泣きしり 泣観  
 笈啼や毎日見ても好い新 芝篤  
 賑りく品をさるあや啼く地 二三

夕顔や曇ら管茶の形も是く 里游  
 侍者や羽衣の移りて須戸泊 結之  
 まるく似子のよき被褥やを念仏 倉更  
 石菖や置た藤葉の月 書山 許亨  
 秋き川や心いあはれ深きあり 徳筆  
 雨月待鶴もあはれ好話い 板明  
 泉の月中や春の思きとあはれい 和室  
 秋まらう方て賑りて去の夢 江砂

秋月や帽子は早ふ 長弓 紀邦  
 松ハ破ふ 離れて海の月 流水  
 或日の玄冥 一と 燕うふ 片春  
 霧しきり 水これ形ふ 氷の風 一侍  
 さふふろふ 一と ありぬぬ 蕨うら 英芝

日御

求ふ求の昔ふ少もかひりて  
 一と一と夜之辰の昔はそなたの  
 思ひま首途の夢と 秋うまをへも

らうて昔者心な又送りて  
 せうふふふふふふの夢  
 分もまのふれ 一と一と 枕の流れよ  
 旅柳のふれよ

春のさや 秋のさや 一と一と  
 流ふささささ 中世の  
 何事か可いさ 惠方此 一と一と  
 ようささささ 一と一と  
 皆々のいふさ 一と一と



赤智も海へ目出度わくなく

負廻

ウ  
此やうある三女の月此義う丁也

後志

あふうりくやうぬ家のはるく

水吉

仕合とえと換えのきものくれ

其地

後飯小和尚まゆくお候

豆斗

堀も皆上塗まてふおまわうり

赤ね

自中ふ和の忌く三賣イタ子堀

始迄

名ハ向のともも知れてあつ阿ん赤粹

相負

すくも備んとも知恵かてやう

負后

は沖國う今よのふおぬ飯今らぬの

其凡

吹月と吹て風の氣風

赤之

翁と詠筆と赤もも柳の本

柳呂

浮まると余海小際ふけま

里地

二  
む録くまひりの反古ま

赤青

山くうふかれくく一あれ

麦丸

おほくは和ふ都あつやうわ

文止

かく海心君の接娘 何よ

未由

まぬくも小昔も祝儀の新阿やめ

素水

海産干巻も海女考く

杜阿

右左伝り一吸

名録

一抄小鏡ひをふしりくよ次

面氣

上ヶ鞠の巻やこまくく巻る様

續巻

張もみ小氣の流るや葉の果

季水

のひきくさくさく 飛く夢 夕涼

季春

夏秋や月影小謙 研道

花ね

さよふさよふさよふさよふさねのむ

甲比

ゆりわくさゆらけくよ色意ふ

美人

月ハ松よふき海りみの住る言ふ

貞石

葉南やふりさるに此りりる

水歩

ゆり虫の螺貝よき川邊のむ

始遊

多ゆりさくし訓譯のむ、 飯一好

東由

若竹や石も和しく花の枝 未之

碧岳くわゆる藤のまじり風 麦丸

草の香は静かや春の氣はけ 且斗

雪よ止んでまほゆる柳ふ 其凡

伏を後おと流しよの流るる水 又止

ふ雪をくくふ雪ふて青阿し 其也

如梅やさけ月影のうまふく 桐貞

後望や水やうみそく流るる水 杜則

ほむよくく雪のむらるる雪 李悠

梅枝の松すくあうそ月今春 素水

雪ふ原入るふふ人ふわろ 梅呂

証きく雪ふ梅咲く十夜のみ 文龜坊

日新

雪原雪ふわろあうそ月今春 其也

きくく山崎もえふふ 其也

塩田 經方一折

こゝや石室の時りて路も石の  
を磨りぬきの山また山ぬの道と  
えりやうたふ山奥の道なす  
ふたりの山人のふたつはなす  
らぬあつたのちうさうさ  
海陸の道なすや在國の道なす  
ほんあつた山ぬの道なす  
とつたのちうさうさ  
とつたのちうさうさ  
とつたのちうさうさ

松  
己音

石の道も十のえりのむも道なす  
また山ぬの道なす

凡事も今和ふの事なす  
け風

自然とき山ぬの道なす  
た群

旬の道なす  
ま草

叫て下され梅戸葉  
巴梁

ほろり月、陽らぬ道なす  
佐例

夕陽  
右長

ぬふらぬあつたの道なす  
桐交

かゝる道なす  
呂映

初冬も春のあけをすくすくあり

巴雄

もほくふくくくくくく

和喬

名詠

花やあき 雨あきふ 汐星

巴原

すれくくくくくくくくく

和香

いさくくくくくくくくく

桐文

はふくくくくくくくくく

友長

あゝ口のねもあゆみあはれ

呂映

ふふふ子依の窓や 鞆叶

信海

漣の形と入江の氷の形

友輝

朽くくく井柳かきむやきかき

巴雄

夕月や夢の月ちるくくく

素堂

瑞草や海汐の越えねの岸

け風

あふふふふのくくくく

乙春

旧訓和会連

八百巻

こゝろは其深處へ飛揚の旨を  
及ふ要成する所度の一事をふり  
かゝの天相願ふ小言を少少の首途を  
又と申しくかゝる事ありや  
ありく一事ありて候

蝶よ舞へて送らん 龍の又ゆると

夕陽西場

忌進むもまもむも浮れ氣

また

すよ唐よむにぬを汁の物そて

あふ碎

湯か減あるの意と白も

柳下

喜しくも舞へてありては公に

け風

習てよとんこにぬり肉

水

あつらひと次も陳るる後の月

牛橋

縁深あるを青葉山

互は

石塚

露の鳴く夢のこゝろ言の糸

久世川

あふ碎

足踏もくもりおも吹流る物

如水

尾寺もむらゝ浮世や巖は

柳下

あつらひもくもり水の底に

互は

三

三

凍解や干痺ふしのさしこ

春橋

緑子啼て西亭の涙もありあり

沈風

日暮や海つらみの白さ

夕河西坊

久世川十白書

あつひの海つらみのさしこ

あつひの海つらみのさしこ

あつひの海つらみのさしこ

あつひの海つらみのさしこ

あつひの海つらみのさしこ

三川亭

町習

論くれしあつひの海つらみのさしこ

美人未あつひの海つらみのさしこ

夏花

山邊柳の二日夕々々あつひのさしこ

柳下

新田の山邊柳の二日夕々々あつひのさしこ

この花

新田の山邊柳の二日夕々々あつひのさしこ

来思

北の山邊柳の二日夕々々あつひのさしこ

二橋

あつひの海つらみのさしこ

水

あつひの海つらみのさしこ

完里

あつひの海つらみのさしこ

海

無<sup>く</sup>そ<sup>の</sup>う<sup>ち</sup>を<sup>も</sup>つ<sup>た</sup>場<sup>の</sup>意<sup>を</sup> 羊

名<sup>の</sup>録

連<sup>ふ</sup>か<sup>も</sup>を<sup>も</sup>つ<sup>て</sup>あ<sup>ら</sup>は<sup>す</sup> 兎<sup>里</sup>

姑<sup>の</sup>苗<sup>を</sup>も<sup>つ</sup> 雉<sup>を</sup> 必<sup>水</sup>

子<sup>は</sup>あ<sup>ら</sup>は<sup>す</sup> 只<sup>を</sup>あ<sup>ら</sup>は<sup>す</sup>の<sup>は</sup>あ<sup>ら</sup>は<sup>す</sup> 河<sup>名</sup>

一<sup>し</sup>れ<sup>は</sup>あ<sup>ら</sup>は<sup>す</sup>か<sup>ら</sup>あ<sup>ら</sup>は<sup>す</sup> 二<sup>橋</sup>

新<sup>は</sup>は<sup>の</sup>橋<sup>を</sup>あ<sup>ら</sup>は<sup>す</sup>と<sup>も</sup>あ<sup>ら</sup>は<sup>す</sup> 柳<sup>下</sup>

あ<sup>ら</sup>は<sup>す</sup>あ<sup>ら</sup>は<sup>す</sup>あ<sup>ら</sup>は<sup>す</sup>あ<sup>ら</sup>は<sup>す</sup> 一<sup>の</sup>橋

あ<sup>ら</sup>は<sup>す</sup>あ<sup>ら</sup>は<sup>す</sup>あ<sup>ら</sup>は<sup>す</sup>あ<sup>ら</sup>は<sup>す</sup> 只<sup>名</sup>

あ<sup>ら</sup>は<sup>す</sup>あ<sup>ら</sup>は<sup>す</sup>あ<sup>ら</sup>は<sup>す</sup>あ<sup>ら</sup>は<sup>す</sup> 一<sup>の</sup>橋

呂<sup>久</sup>古<sup>白</sup>表

女<sup>の</sup>園

あ<sup>ら</sup>は<sup>す</sup>あ<sup>ら</sup>は<sup>す</sup>あ<sup>ら</sup>は<sup>す</sup>あ<sup>ら</sup>は<sup>す</sup> 其<sup>の</sup>表

あ<sup>ら</sup>は<sup>す</sup>あ<sup>ら</sup>は<sup>す</sup>あ<sup>ら</sup>は<sup>す</sup>あ<sup>ら</sup>は<sup>す</sup> 又<sup>た</sup>

あ<sup>ら</sup>は<sup>す</sup>あ<sup>ら</sup>は<sup>す</sup>あ<sup>ら</sup>は<sup>す</sup>あ<sup>ら</sup>は<sup>す</sup> 去<sup>り</sup>

あ<sup>ら</sup>は<sup>す</sup>あ<sup>ら</sup>は<sup>す</sup>あ<sup>ら</sup>は<sup>す</sup>あ<sup>ら</sup>は<sup>す</sup> 一<sup>の</sup>表

あ<sup>ら</sup>は<sup>す</sup>あ<sup>ら</sup>は<sup>す</sup>あ<sup>ら</sup>は<sup>す</sup>あ<sup>ら</sup>は<sup>す</sup> 知<sup>水</sup>



化粧帰るる 垣小糸取

巴ね

名録

其之申さる可ふ山もささふ

三日坊

春あけのすまき川さうも 菜塩

糸水

張燈不 鶴 ぬせく 木の葉水

巴ね

油 輝や ねふこまて 文ちう

一の玄

柔くさ川 籠く 一さや 杜若

其取

宮田六白書

言飲君の心未代に文巻の妙をささる  
因西狂舞ともむ 一さや 一さの九さ  
吾言さあふあふささる 鶴の酒さ  
はふあひあふささる 一さの九さ  
月あふささる 一さの九さ  
一さの九さ

又送るも 笠ささる 一さの九さ

春遊

くさくさ 鶴ささる 一さの九さ

生

また

秋あけのすまき川の 沢あがりて

糸水

何とあてふ 張る 燈の 圓

里ね

石を や 籠るささる 一さの九さ

一の玄

吾輩あつて候ふ不角力 平

久保

もも香もあふ葉も柳の風 里伝  
柳り表の柳もあふ柳大なる 了后  
早急ぬ柳の葉や雛子の夢 公之  
七種や山柳もあふ柳の白 香由

中宮

及も候あつて候ふ名の時分わ 尊代

まゝも安さも岸線の旅 更た

十七条

板子里の旅又送るやうとむ 朝 在連亭 柳友

くまも柳の心もあつて花と友 更た

十五条八の表

又送るもあつて候ふ名 柳 有源亭 柳友

まゝも柳の心もあつて花と友 更た

善くも柳の心もあつて花と友 更た

くはくく世のほくことあり

龍二

姑まぬる悟氣の角ふー

巴水

捨つと女夜をさすてー遠く

香井

お芳も静まりの月のささる

里元

須二も石もさるる 秋

汶二

名詠

風や雪のむくくね猿の夢

里元

雪の氣や介の文ふさ水の喜

巴水

海山小夢も暖さるる 層

柳溪

月氣小我ぬりさるる 彌

龍二

矣叫ひの神を青くを熊子の声

汶二

吹度小峯抄風の帯 一の那

香井

乳いりの若子を原させての納涼

里元

改回古白素

又送らんく其のまをさるる

香古

ゆりむく跡も其ぬるる

また

お梅よけさよ 神も名のまて 何故

古いよりのあきまきあひ紙書 せ

若入の被り 浮きも月うり 二

前も人目と サ、ヤキ 密渡の橋 三

名塚

さねと町ふさ 込ら水と田裡水 細糸 何故

啼捨と沖やうー 一 時 二

流虫や月終つす月まのー 女 三

眠る襟やさあつとさきと指あし 一 糸今  
梅の香や春ハ文あくとさねまねと 二 糸古

下西江ハと書

こころの春のまよふは春とあひま  
のちと春の春のまよふは春とあひま  
のちと春の春のまよふは春とあひま  
又送つて

軽うらんさふさ 藤の枝 松葉園 紙書

なごり 隣は遠ま せふ山 三 文記

うらうらふ神あもな地まー 海と 二 文記

流しそけてる水河の帆

文法

さあ〜もさ山りうあぬ入ほくら

里亮

枝川ふりう 流ふ

熊吉

う〜き〜月日の心あも氣のり

之切

藤の藤水 折ふ

藤旭

名詠

行〜も〜も〜う移る 信九うふ

文鶴

雪〜も〜も〜も 及原と板の橋

里亮

〜も〜も〜も〜も 水も流りん 海橋

之切

井治 近〜 程〜 信九うふ

文法

〜も〜も〜も〜も 水も流りん 海橋

藤旭

〜も〜も〜も〜も 水も流りん 海橋

熊吉

〜も〜も〜も〜も 水も流りん 海橋

鶴岡

長屋六白表

道〜中〜子〜里 独歩の志此旅

一年

〜も〜も〜も〜も 水も流りん 海橋

文法

ありあけの井の恵もも海をみて

志江

花は流りしと **輝**ふしあけの

梅土

云はるの月の中

里雄

ほろめよこのぬふ春の玉

手

名派

一葉二葉のよきうらみ梅葉

里雄

さきや梅の人まきく神の表

梅土

風や梅ふ癒く 氣の月

志江

系費連 八白表

石路老之州の隅まきくはらの源まきく  
とんとおろし 慈母の天むらさきと  
旅まきのあけを流しゆく

花ひ汐にすまよるの海にふ

文翹

花にまきくおき旅も永まは

また

花は流りしとあけの月の中

塙斎

花は流りしとあけの月の中

長栄

通りぬし命のあけふ

和永

錦と花と心と花と 平く 李花

ほろりと家の内やうふ川原 月琴

流るやうの折も遠く頃 草

名塚

味もくさくさくは 唐の神味暗が 西に 月琴

青月小氣程 流し 萩の春 川 和歌

草や梅も多し 壺の先 ソロ 芸茶

草のう 西やふてう 揚雲在 李花

夕暮の情さうし 春 木槿 ソイ 塙前

中白

うらやまう 赤う ぶら 旗 扇 旗幟 高直

能と春と 花と 中よ 山 夏花

結 八の春

漢西のゆきと花と 唐く ぶら 扇 旗幟 高直

論一より居の自然の如く  
氣の園 舟下

柳 心そ とき日 一 秋 夏丸

路の 神の燃火<sup>キリ</sup>の心 秋を 一 一 土 遊

引 横 雲ふ 時 飛ふ あり 夏 丸

又 心と 可し 心 ぶ あり とき 秋 左 巻

昔 あり とき あり とき あり とき 味 縁 柳 雨

何 あり とき あり とき あり とき あり とき 秋 夏 丸

西 あり とき あり とき あり とき あり とき 里 佳 丸

名 縁

ま あり とき あり とき あり とき あり とき 夏 丸 土 遊

経 冊の あり とき あり とき あり とき あり とき 秋 佳 丸

初 あり とき あり とき あり とき あり とき あり とき 子 巻 左 巻

春 あり とき あり とき あり とき あり とき あり とき 時 夏 丸 夏 丸

芭 蕉 あり とき あり とき あり とき あり とき あり とき 巻 柳 雨

今 あり とき あり とき あり とき あり とき あり とき あり とき 梅 舟 下

お 小 あり とき あり とき あり とき あり とき あり とき あり とき 久 夏 丸 夏 丸



三日市

接えりて送りのほのけり

また

日わたりてふ公せくせぬ

また

十九日

送り阿久ぬ赤の首途や何れとも

呂松

やのふ余波のそぬ永ふ日

また

大橋八百景

又送りのやのそりてふあめし

草子松  
杜心

やうねりて海のく唐ふ生のせ

また

今も玉移り非代のふ思改修りて

また

ふよ阿久波あふ赤ふ

松柳

舟修り果波をそとせりて

鳥入

あふゆりくそ酒ふせりて

心せ

ちりりとむらじり月も十日

鳥書

望田ささりての初声

鳥書

名塚

夜中涼し破り寝る友子尋  
 多言て朝不府餅や雪化翁  
 長年さ中雨遠くぬ鞠の音  
 帰るも心と在るなりきお紫  
 不等すお和よふとせ川合ふ山  
 又ありお宿をのふりう物とふす  
 居たうくお逢せり香や壺の梅  
 鳥舌

大藏十白表

里くも春の音侍人前逢  
 浮き向きお涙りぬて  
 館の春うらなふ夕ぬて  
 時あま何うてお淡義の流  
 余不えととりて思ひと用て知も  
 よえ初めう蔵をまき此系  
 心匠とあまおまをほの笑くう  
 何らくうねのせぬ入取  
 友尋  
 また  
 春楊  
 筑里  
 瑞橋  
 里産  
 高川  
 え生

新編

六十一

月小つゝ今よのち 孤後かお詠 一の院

右酒小新酒よ中級のお 一の院

名詠

系新や庭の好秋も夕日詠 里急

七草やてあやせ中よほく詠 楊梅

ほつてを女海小川めろく川 赤楊

ほろ碑くとさ湯を燈もや星月詠 龍里

喜ア此碑よねふ 結詠 一の院

喜及るとても 移るも 詠の 雪 高月

氣新や氣よくよ 詠く られ くの 中

之きりーよ 落よ何はよ 詠の 夢 可恨

日詠

春の詠や尺送る人の世よ 詠あり 鳥院

一段の信とやまよる 詠 夏夜

葉うよ火詠とちる 詠ありて くの 中

右三ツ物

新編

六十二

ゆえ松 春の

送る日名 春も 降りゆく 揚雲花 檜

よみゆくも 春も 春の 花 春

下川

春の 春の 春の 春の

春の 春の

おふ 時 春の 春の 春の 春の

さき 春の 春の 春の 春の

和納 春の 春の

春の 春の 春の 春の 春の 春の 春の 春の 春の 春の

春の 春の

春の 春の

春の 春の 春の 春の

春の 春の 春の 春の

春の 春の 春の 春の

春の 春の 春の 春の

つるく〜徒兼刀ふ羊の皮 風沙

おほれ下とと又科の月 九章

一と〜と奏渡しぬは海流れ 矢の

何〜とにせのすの中〜とと 一水

早〜とふ又の節も春の〜 里好

初〜と何〜とをの汁〜と〜と 南高

咲〜とつる程〜とふり春の落 素菜

心〜と何〜と於も 廣よ 紫雪 青雪



名録

本穢〜と凡言後何〜とは秋 梅侯

發〜とと化糖湯〜と何〜と柳〜と 風剛

眠〜と寝〜とふもき〜と中〜と初 睦 青雪

き〜とと本子本の中や〜と何〜と 九章

深〜と何〜と新〜とふ〜と何〜と紅紫 里好

初〜と何〜とや〜と何〜とを〜と何〜とふ〜と何〜と 素菜

ぬ〜と何〜と乾〜と何〜と何〜と何〜と何〜と 南高



赤い雲をわけて予子此是う那 一水  
 冬月やきしうふりぬけのこ 笑の  
 さやちる子 ねえ ち あう 何者  
 気まねや 網代本さうぬ水りあり 麦五

定集

昨ハ英西のつとよははれてさかると  
 向きうぬるを夢いぬい我まふ  
 水陸の位面を許さぬうきまふ  
 りととらうとてはまふさうんさ  
 石根津の如きとさういふや月影の  
 時世旅まきくまぬとと誰かの詞を

押かきし月影をぬきぬきぬき

西むしーとまふぬきぬきぬき 一水  
 さうとまふぬきぬきぬき 又た  
 けしーふまふぬきぬきぬき 白灰  
 夢しとぬきぬきぬきぬき 兼何  
 着しとぬきぬきぬきぬき 條水  
 深ふまふぬきの影 赤通  
 元のうしぬきぬきぬきぬき 定基

さうさくあまをりしん 浪 五 羽 全

海くも波も静ふ 和交の浦 貞幹

霧のくもりの 日の暮も遠くきり 重英

赤松のちゆりしれあふまれの 鞠 柳 里

及ふあつとと尾籠らへる 可 曉

二 同くあふくくしあり 里もあり 長 律

交わくくくくくくく 何れ逢はく 之ノ

る 藤らくくくくくく 難進口 一 輝

海くもあつととり 吾の 何 妙 素 川

若らくくく あつとと 吾の 小 松 京 白 牛

右 藤 芳 一 歌

之 派

之 吾 何 法 之 飛 て 中 古 の 月 又 亦 白 夜

さうさくあまをりしん 浪 五 羽 全

さうさくあまをりしん 浪 五 羽 全

さうさくあまをりしん 浪 五 羽 全



老翁

三十一

樹くふまことほくふ亭や舞月晴 定基  
 芥の香もあふ淋しや秋の心 貞幹  
 物もあておつと愁の涼もふ 季英  
 雲の影も香ふぬりむくや梅の香 可悦  
 じつとくくし香を何くも戀月 友伴  
 雪しとや雪うこと急りて村さく 羽全  
 花れくくさるふあめあつるさふ 素川  
 柳よ藤をいふうくの踏長山 一輝

松尾のまよ海へち小夜しとれ 女 とい  
 花をちかて神とあめあめはく言ふ 白牛  
 悲し涙のあつとあしや婦人 條水  
 物も秋ふ水い流るる秋の雨 左波坊

日訓

百千言ふ心同あつとさくし枝 馬十坊

ちんときをけのほもあつと 夏丸

日訓



秋

三十一

晴く待春入柳花小町 夕八十五 友字坊

かきくも 文 ときよ 心 また

日新

困

折くとも 能く渡りし 首途迄

さくし 心も 春の 氣候 また

日新 古の表

春と 待友 心くとも 春の 心

具書

くさくさ 花も 折ふ 水より また

櫻さゆ 名のよ 花もよ 小町 楽二

れと 春とも 春も 小町も 順之

くー 春くー 春と 春の 肩 遠路

秋の 春くで 春く 春一 旅 中波

名塚

つゆと 春と 花のよ 春と 揚を 花 楽二

櫻の 春くく 春よ 春の 春く 旅 中波

七浦 春く 春よ 春く 春く 旅 和洞

秋

三十一

長良

控船へ寄りてゆく長良の川

ふもとの水は清く流るる

舟は小舟もかきかきゆく

長良八景

首途行く舟もや西行はく

柳の影も水面に映る

雲も霞も白くしる

舟も今も昔も同じ

舟も今も昔も同じ

九重の都をさきかき

舟も今も昔も同じ

あまの川も昔も今も

舟も今も昔も同じ

名派

ふもとの水は清く流るる

舟も今も昔も同じ

舟も今も昔も同じ

長良

長良

九

三十三

りく水の流ふわくくふき水 赤園

いし川あそこを思ふ唐の枕味ゆふ 翠如

下戸と交てゆく我打踊うね 梅月

折三

春も舞ふ春の首途やとぬくは 啓周

おこをゆきうのこゝあゝそ また

石井

ねくぬく流まきりく柳ふも 和地

よき舞うともまきりく初あゆむ また

高島と白表

法興寺

弁也

己送るや雪花も揚ぐ花の旅

こゝろささくうものこゝろそ また

嵐ふ沖秘ふ春は香は阿うて 一葉

雲のおくすも掃除ふゆく 又橋

ちか月の影ふそと斗ふ月の眉 松丈

通ふりのひも雲深の秋 巴江

三十一

三十四

名詠

あはれ目のまこと 娘の 時を 巴に

咲ふく 木あめと 木ふ 牡丹ふ 夏椿

ふさふさ 水ふ 音て ありしも 松史

唯ふ 師 深きく 中ふ 木あめ 玉 一葉

大素 八の巻

娘と 咲ふ 木あめ 木ふ 玉の 首途 素剛

ほろろ 木あめ 柳の 海原 一葉 また

教介 木あめ 結の 法い 玉 秘を 一葉 木あ

まを ころり 木あめ 葉の 葉り 若く 梅二

船屋 明て 出るを 海を 又い 若 磯水

其の 娘い の 神々 阿ふ 一葉 え柳

中ふ 木あめ 一葉の まを 木あめ 月のみ 琴く

友あめ まを 通ふ 一葉 木あ

名詠

雲の 木あめ 木あめ 説く 木あ 時を 素剛

本家や空のそらも深く青  
浮雲の葉の香やぬるこ川  
え柳  
あくは海の葉よふてはぬるふ  
この葉  
よむと川のこぼれよふく流石  
翠々  
静もさりしはしむ流るるのこ  
梅二

北神宮と下連

經宮行一好

京河また由場長石の松蔭を時あり  
りよ中葉よふるおは送あると思ふく

人くしはかきく門のせつとてはしめり  
よめはゆ房のゆいあふりの柳を流るるを  
よとちり流るるを

秋石亭

里水

今も春とまきんさきく流るるハ  
え本ふくもさけりて處  
また  
高も離る柳子はさのあて  
この葉  
柳の境も靡よさうさう  
あ送  
夜もさしはしはし風て月の氣  
あは  
あは  
あは  
あは

清きやう大なる下戸もこれ 影地

海に船着きん船こゝ 儀二

舟り船り世の中あゆむしと 梅戸

都ふりくくを何とん 以地

芳しぬ梅津の里あかぬりぬ 鳥泊

くく飛す鳴てまもやと 伊凡

名塚

とえと都水を凡の柳ふ 鳥泊

藤のむや深も海もまてせ 一の樂

くくあま想いふふとさく 慈化

瑞草中細川揚々流せぬ 影地

草飛て海の傍へ水 島逸

長ふさや水あもき川と松の蔭 伊凡

長ふ夜や扉とくれて又撫を本 梅戸

葉のむやう月水と程の應ふし 里卷

海を伸て飛過ふもや青 儀二

麦秋や后も初月とて田舎町 以花

梅の香や懐懐あつ垣の何物とて 里水

千丈

理野

嘆息よよく嘆の旅とて

時節あつたや春も深れ奉 夏花

春もあつたや春も深れ奉 吾亦

石三ツ物

秋見と白素

秋見と白素

又送りて

三條堂

秋見と白素

可もあつたや春も深れ奉 夏花

秋見と白素

又てり秋の香あり奉 吾亦

さしやる月も玉の香あり奉 如流

秋見と白素

冬派

おのゝみ、作、く、け、る、海、の、

淡更

ふ、あ、ま、や、ち、の、ま、さ、な、か、ら、

如流

ま、あ、ま、か、り、く、す、お、違、一、落、の、塔

書言

其、の、務、負、は、さ、さ、さ、さ、さ、さ、

白得

度、く、く、雪、積、む、く、は、月、お、

珍事記

同洲 古の昔

又政長の本また山崎長政の律  
より種小鳥一鳥藤の花のしきと  
えんせしき一物あきと前を道を行きて

論、さ、ま、ま、東、風、ふ、花、う、ん、三、ツ、の、

音言  
非也

く、く、ら、破、り、の、縁、も、あ、ま、日

また

知、年、ハ、度、ふ、は、守、り、お、の、わ、く、ふ

柳垣

い、く、月、あ、り、も、さ、さ、な、難、中

由夕

其、候、小、原、礼、髪、の、お、は、月

仏地

ち、れ、と、柳、の、あ、嫁、婿

手

急派

傳、り、け、と、松、淺、く、月、や、あ、れ

程地



水庵の小石ききく後の月 柳橋

只臨る子仇連りも庵の香 雨夕

招くも落ふ花も 徒然草 仏燈

岩田三ッ助

又送ん過り 飛く 子なき 兼好

是れも 心も 土の 心月の 妻た

澄くも 大無の 鏡の 雲より 心久

名塚

笑初一 是れ心も 花百口 心久

花いろも 口癖の 長く 是れ 兼好

長末六白書

本所石のうらまへより 顔ふ花をとりて  
その心持りし また心持りとて 是れ心持りて

花の友 三白 心持の 徒然草 兼好

天へ 海も 心持 兼好 兼好

心持 兼好 兼好 兼好 兼好

樹も 心持 兼好 兼好 兼好

月代ふさくつとろまを頼り

二層

舟ふさくつとろまのこぼ

白昼

名塚

其くは青くくせぬ西風山

古希場  
なき考

まきくくつとろまの月夜

白昼

舟はや遠く思ふくまぬ声

杜有

つとろまを思ふくまぬ声

二層

舟はやまのひまを思ふくまぬ

飛地

切通 續分行一打

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

道の噂を月よまよふ思ひ

左氣

ねくくつとろまのこぼ

変尺

変化するすふハ自然の味解て

二層二

さあさあ 舞ふかきーはあり

古象

さあさあ 舞ふかきーはあり

優々

神定くとも 心持さうら

老久

本定はく 秘んとしてす一也

意帆

義理はあふはめかたお方

梅曉

みやまーふうふう 舞うさうも

克己

深もまぬふんさく 駢京

慈由

きーふさうさ 舞うさうも

ふん海

花さ 舞もさうらーのま

倍凡

名塚

このまじりや 舞あはれさうら 細の人

舞二

我、舞のまきさーさうの月

ふん海

あーあけき 松のまきさうら

優々

夕暮やさうら 舞あはれさうら

梅曉

○

舞あはれさうら 舞あはれさうら

古象

凡、松ふつてもわたし一凌香と 古氣  
 是くはさきのしきと何九月を 三帆  
 余のさふまふも悟し一廿而む 若久  
 編福の樹を 夏、くされ 樽 夏己  
 一さくも 柳ふさくも 帯くさ 海風  
 雲もくさふもあひあひて 秋之ぬ 細知 意由  
 大時 古の表  
 松安園 三更  
 競りくく 足送るも 中揚雲 花

折却、猿も 赤の 氣流 また  
 神代めく 叙式此 ねの 因こて 又南  
 海邊 喜の 志きき 海、七 赤月  
 舟の 志きき 持てくく 物、月 竹史  
 今や 舟めく 縁の 六中 舟  
 名流  
 句、くく、いさ、は、ん、ん、よ、の、牡丹 又南  
 舟、く、く、く、く、く、く、の、香 赤月

初雪のふり 秋のふり 松のふり  
夕暮のふり 秋のふり 松のふり

下中屋と白雲

秋のふり  
和歌

梅ももも 秋のふり

白雲のふり 秋のふり

土地のふり 秋のふり

名ももも 秋のふり

秋のふり 秋のふり

初雪のふり 秋のふり

名塚

初雪のふり 秋のふり

秋のふり 秋のふり

秋のふり 秋のふり

秋のふり 秋のふり

秋のふり 秋のふり

田舎と白雲

ふくまかゆんふれはるかに

糸道

こころをなごころにすまふ

また

あつゝ禪の一字のうへ解く

乍哉

あつゝのふふやうふれはるかに

虎丘

ふくまかゆんふれはるかに

あつゝのふふやうふれはるかに

糸道

あつゝのふふやうふれはるかに

乍哉

あつゝのふふやうふれはるかに

虎丘

糸道

天命を庸なくて善く其の徳を  
あつゝのふふやうふれはるかに  
あつゝのふふやうふれはるかに  
あつゝのふふやうふれはるかに

あつゝのふふやうふれはるかに

古き

あつゝのふふやうふれはるかに

また

あつゝのふふやうふれはるかに

虎丘

波のくくくくくくくくくく 何処 楚ね

月代のくくくくくくくくくく 何処 しの松

新米利のくくくくくくくくくく 何処 志負

都のくくくくくくくくくくくく 何処 去光

何房のくくくくくくくくくくくく 何処 徳水

何房のくくくくくくくくくくくく 何処 壺洞

天竺のくくくくくくくくくくくく 何処 馬柳

天竺のくくくくくくくくくくくく 何処 一井

何房のくくくくくくくくくくくく 何処 一阿

何房のくくくくくくくくくくくく 何処 長園

何房のくくくくくくくくくくくく 何処 彩一

何房のくくくくくくくくくくくく 何処 逢藤

何房のくくくくくくくくくくくく 何処 里琴

何房のくくくくくくくくくくくく 何処 二石

何房のくくくくくくくくくくくく 何処 芳水

何房のくくくくくくくくくくくく 何処 如流

神をよめる此流の秋流 之流

う 流計ふ流をわたり一葉はす 名流

五くくくくくくくくくくくく 雨前

引くくくくくくくくくくくく 里風

能く流まを筆流く 法石

名流

け秋や詠ふ流く夢ハ 何 地夢

きくくくくくくくくくくくく 望風

さあくくくくくくくくくくく 一の松

吹よくくくくくくくくくくく 其粒

今氣熱く流石 河心 書解川 之流

む夜子やと流く 故葉 河心 之流

吹よくくくくくくくくくくく 名流

木楠くくくくくくくくくくく 其流

凡流の流くくくくくくく 雨柳

流くくくくくくくくくくく 土園



むのさし一松を河をそをよき

徳水

吾移や書生のさき耕りせむ

里野

野水もさし不流り一石も

影一

又ありのさき花もよき

良好

又一好原もよき、よき月

善水

夢もよき、花場くく電音ふ

月影

今もよき、我、流り、池も、松のよ

逢夢

り秋や木のさき、一壺、所、よ、所

水流

代松く、松も、夢、ゆ、松、ゆ、松

流石

さのさき、河、ゆ、松、の、よ

一井

人のさき、松、の、松、よ、松

一石坊

初坪や松のさき、も、松、よ、松

古松

○

流石や河、ゆ、松、の、松、よ、松

壺洞

